

資源増大技術開発事業（要約）

（ヤコウガイの種苗生産及び放流技術開発試験）

勝俣亜生・安井理奈

本研究の詳細は平成12年度資源増大技術開発事業報告書において別途に印刷したので、ここではその概要のみを記す。

1. 種苗生産技術開発

1) 親貝養成試験

採卵時期を早めるため、冬期加温飼育した親貝を用いて採卵を試みたが、産卵しなかった。

2) 昼間採卵試験

昼間に採卵するため、明暗の周期を5時間早めた暗室内で親貝を飼育し、採卵を試みたが、産卵しなかった。

3) 親貝の雄雌判別試験

サザエで行われているKcl滴下法による雌雄の判別を試みたが、精子、卵ともに確認できず、判別はできなかった。

4) 種苗生産

採卵翌日に幼生が全滅することが多く、種苗生産数は15000個にとどまった。

2. 中間育成技術開発

1) 餌料試験

カタオゴノリとGracilaria sp.を与えた場合の稚貝の成長を比較した。両種を与えた場合の成長が最も良く、カタオゴノリがそれに続いた。

2) 飼育水槽の改良試験

稚貝の成長と生残を向上するため、水槽の改良を試みたが、明確な結果は得られなかった。

3) 排水沈殿池での中間育成試験

水産試験場八重山支場内の排水沈殿池に稚貝を放流し、中間育成試験を行った。成長は水槽飼育個体より良く、大型貝では回収率も良好だった。

4) 冬期の大量斃死防止試験

① ホルマリン浴による斃死防除試験

2週間毎に100ppmホルマリン浴1時間を実施した。今年度は冬期に大量斃死がおきなかつ

たため、効果は不明であった。

② 個体別行動観察

識別マークをつけた60個体について、行動を観察した。こちらも斃死個体は少なかったが、斃死した個体は他の個体に比較してシェルター内に隠れることが少なかった。

3. 放流技術開発

1) 標識放流

着色ポリライトで標識した殻高25mm以上の稚貝22800個体を石垣島白保沖と竹富島南沖に放流した。

2) 標識放流の再検討

殻頂部への着色ポリライトによる標識は石などに擦られて部分的に脱落することが水槽実験で明らかになっている。殻の大部分をポリライトで標識した稚貝を放流し、天然での脱落状況を調べる。

また、漁獲されたヤコウガイには殻頂部が破損した個体が多いことから配合飼料で飼育した殻が白色の稚貝を放流し、この色が漁獲サイズまで残存するかどうか調べる。

3) 漁獲物調査

石垣島に水揚げされたヤコウガイ約500個について、殻高、殻幅、体重の測定及び標識の有無、漁場を調べた。また、水揚げの多い漁業者2名に操業日誌の記入を依頼した。

2000年の八重山でのヤコウガイ漁獲量は1300kg、790個程度と推定された。1997年以降漁獲量は増加傾向にあるが、放流海域での漁獲量の増加は認められなかった。

標識の付いたヤコウガイは発見できなかった。